

第16回 3つの『ダイアナ』でわかる 「カバー曲隆盛」の秘密

昭和33年2月、初めて開催された「日劇ウエスタンカーニバル」において、山下敬二郎、平尾昌章（のち、昌晃）、ミッキー・カーチスの、いわゆる「ロカビリー三人男」がプレイクします。

山下とミッキーは同学年、1学年上の平尾は慶應高校在学当時、同い年の加山雄三と同級だった、という話もありますが、加山とは会話のなされないまま中退し、ロカビリーの世界に飛び込みます。

この3人のうち、カバー曲に競作の多いのが山下と平尾ですが、2人が歌った2つの『ダイアナ』の歌詞を聴き比べてみると、見えてくることがあります。

どちらも、ウエスタンカーニバル開催後の昭和33年4月に発売されていますが、多くの人に知られているのは、平尾盤（訳詞・音羽たかし）ではなく、渡舟人・訳詞の山下盤のほうがでしょう。後年、平尾が『ダイアナ』を歌っているのをテレビで見たことがありますが、山下盤の歌詞

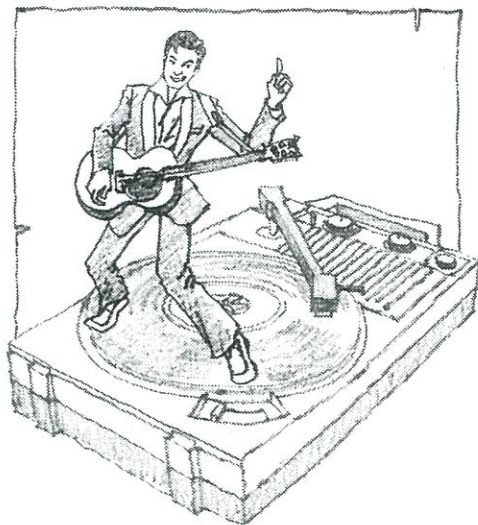
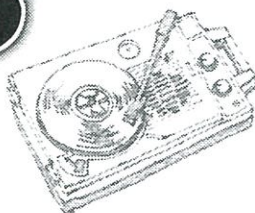
で歌わされていました。

実は『ダイアナ』には、もう一つ清野（せい）の太郎によるカバー盤（訳

名曲カルテ

昭和歌謡と いまでも

堀井六郎
絵・松本浦



詞・服部レイモンド）もありましたが、やはり山下盤にはかないませんでした。

なぜ山下盤のみに人気が集まり、後年まで歌われ続けたのか。歌手の違ひというよりも、訳詞家・渡舟人の手による山下盤の歌詞自体にその秘密があったのではないか。

第1回ウエスタンカーニバル終了後、洋楽を日本語に訳し変えたカバー曲が雨後の筍のごとく誕生し、私たちを楽しませてくれるのですが、ヒットを量産した陰に多くの名訳を残した漣健児の存在がありました。

昭和35年、坂本九が歌った『ステキなタイミン』から始まり、「アスパラ」のCMソングを歌っていた時代の弘田三枝子、高橋元太郎が在

籍していた当時のスリー・ファンキーズ、梅木マリ（のちの松平マリ子）、目方誠（美樹克彦の子役時代の本名）など、漣は多くの歌手にそのユニークな訳詞を提供しています。

飯田久彦の『ルイジアナ・ママ』が典型ですが、まさに渡舟人が『ダイアナ』で開拓した訳詞法と同様、メロディーに多くの言葉を乗せてリズムカルな日本語にしているのが特徴です。

四分音符に日本語を2文字（従来の倍）乗せてスピード感を増し、言葉が多くなった分だけ歌を膨らませる情景描写や感情表現を盛り込み、さらには英詞をとどころに挿入しオリジナルの雰囲気を残しておくという手法です。

口ずさめばわかりますが、軽やかさとバタ臭さが実に心地よい。従来の歌謡曲的な言葉の乗せ方をした平尾盤や清野盤には8ビートの日本語の新鮮さが欠けていたのです。

その後、GSという「和曲洋風詞」時代を経てこの路線を踏襲したのがキャロルで、日本語ロックを探究していたミュージシャンたちを一蹴してしまうことになりました。